



慶應言語学 コロキウム

慶應義塾大学言語文化研究所
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

障壁理論から現代へ： 局所性研究の進展・課題・展望

日時：2026年6月6日(土)～7日(日)

6日(土)13:00-18:00、7日(日)10:00-16:30 ※昼食休憩 12:00～13:30

講演者：中島 崇法(弘前大学)、勝 慎将(南山大学)
杉本 侑嗣(大阪大学)、堤 博一(都留文科大学)

討論者：大石 正幸 (東北学院大学名誉教授)

司会・企画：中島 崇法 (弘前大学)

コメンテーター：内堀 朝子 (東京大学)、北原 久嗣 (慶應義塾大学)

会場：慶應義塾大学三田キャンパス北館大会議室 ※対面開催のみ

使用言語：日本語

* 今回のセミナーは生成文法研究の専門的知識が前提となります。

* 参加申込： 研究所ホームページもしくは右のQRコードよりお申込み下さい



人間言語にみられる局所性の解明は常に生成文法理論の中心的課題のひとつであり続けたが、Chomsky (1986)の障壁理論の登場はその重要な節目であった。障壁理論が試みようとしていたのは、人間言語に見られる局所性を障壁という概念のもとに統一的に分析するというものであった。障壁理論の登場から40年経った現在、生成文法理論は大きな変化・発展を遂げ、障壁理論が仮定していた理論的装置の大部分は極小主義の展開を通じて解体された。しかしながら、障壁理論が依拠する基本的なアイデアのなかには、現代の枠組みでも命脈を保つものや、最新の枠組みにおいてこそ新たな意味づけを与えるものも存在する。加えて、障壁理論が試みようとしていた局所性現象の統一化が可能か否かという問題も、40年の研究の深化を踏まえて改めて検討する余地がある。そのため本コロキウムでは、障壁理論を参照軸にしながら局所性研究のこれまでの進展や課題を振り返るとともに、局所性研究の新たな展望を描く。

コロキウム 1 日目は、障壁理論が扱っていた諸現象を極小主義の最新の枠組みである Miracle Creed (MC) Framework (Chomsky 2024)のもとで捉え直す。中島講師は障壁の概念を MC Framework のもとで再翻案し、島の効果の統一的分析を試みる。勝講師は、同じく MC Framework に基づいて wh 疑問文や寄生空所構文の局所性を再考し、新たな分析を提案する。

コロキウム 2 日目には、障壁理論が掲げていたアイデアや研究目標をこれまでの研究の展開を踏まえて再検討する。杉本講師は、主語の島・付加詞の島条件の非統一的分析を試み、それぞれが統辞部門内外の諸条件の相互作用から独立に導かれることを論じる。堤講師は、障壁理論が導入し現在もフェイズ理論に持ち越されている VP 付加という操作の理論的・経験的利点と問題点を検討する。

第1日目

- ・趣旨説明・障壁理論の概説 (中島崇法)
- ・発表1「Barrier から Box へ：MC Framework における島の制約」(中島崇法)
- ・発表2「MC Framework における局所性」(勝慎将)

第2日目

- ・発表1「CED 効果再考」(杉本侑嗣)
- ・発表2「VP 付加の展開と展望」(堤博一)

共催：科学研究費助成 基盤研究(C) 25K04101 『併合と最小探索に基づく日英語比較研究：統辞構造はどのように生成され解釈されるのか』

主催 慶應義塾大学言語文化研究所

[お問い合わせ先]

〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所
電話：03-5427-1595 (事務室直通) メール：genbu@icl.keio.ac.jp
http://www.icl.keio.ac.jp